

結

絞首台の鐘が、からころ鳴っています。

「どうして、人間は食べもしないのに殺すのかな？」
あなたは首をかしげます。

店主／アルヴァンの肉をおいしく食べることに、
店主／アルヴァンの作った料理をおいしく食べることの違いが、
あなたにはよくわかりません。

「……ふふ。どうでもいいか、そんなこと」

あなたは気付いたのです。
あなたが一人ぼっちでないことに。

あなたは気付いてしまいました。
我慢していた『おいしそう』は、本当に『おいしい』もので。
仲間になりたかったものたちは、あなたの為の『ごちそう』でした。

「いいな、世界は素敵なことばかり！
今ならなんでもできる気がする！」

ご機嫌なあなたは、舌なめずりしながらにこりと微笑みました。
視線の先にはちょうどいい頭数の、閉じた村があります。

「さあ、夜が来る。ゼーんぶおいしく、平らげちゃおう」

+++++

END-S-2：『克服なき獣』